

眞妄に關する研究

伊藤 古鑑

一

眞と妄とに關する研究は『大乘起信論』に委細を極めて居る。即ち眞如緣起論であるから、主觀的に吾人の一心を取つて大乘の體と定め、その一心の法體は所謂自性清淨心であつて、本來三世十方の諸佛の功德を含藏しては居るけれども、今は凡夫の悲しさに、本然の性徳を覆蔽して外面に表顯することが出來ないと説くのである。これを『起信論』の上では眞如と生滅との二大部門に義別し、一心の法體は一であるけれども、眞如門の義邊に依れば一多差別の相を泯亡し、佛凡とか迷悟染淨とか云ふ名字すら無いのであつて、法界は平等、萬有は一相一味であると云はねばならぬが、これを生滅門の義邊より眺むれば、湛然寂靜たる水が千浪萬波と生じて動轉起滅し、清となり濁となり、迷悟染淨の現象を呈するのである。故に一は一心の絶對の方面であるとすれば、他は一心の相對の方面より見た説である。即ち本體と現象との關係であつて、眞如本體の外に生滅現象があるのではない、生滅現象の外に眞如本體がある筈はない。眞如即生滅、生滅即眞如と云ひ得るけれども、そ

これは法體に就て論するので、その義用としては二門永く區別すべきものである。眞如は不變不起であり、不和合不生滅である、時間空間を超越し、吾人の認識を以て論することも出来ない範圍であるが、これに反して生滅は隨緣起動であり、和合生滅である、時間空間を以て論じ、また吾人の認識を全然超越したとも云はないのである。かくして此の二門の義邊に依つて巧みに本體と現象、眞と妄との關係を論じやうとして居るのである。

心眞如者、卽是一法界大總相、法門體、所謂心性不生不滅、一切諸法、唯依妄念而有差別、若離心念則無一切境界之相、(『冠導起信論』中本三丁)

心生滅者、依如來藏故有生滅心、所謂不生滅與生滅和合、非一非異、名爲阿黎耶識、(同中本九丁)是心從本已來自性清淨、而有無明、爲無明所染有其染心、雖有染心、而常恒不變、是故此義唯佛能知、所謂心性常無念、故名爲不變、以不達一法界故、心不相應。忽然念起名爲無

明(同初下本丁)

これに依つて考へて見ると、一心眞如は一法界絶對無二であつて、一切萬法の本體となり、不生不滅であり、不増不減であるけれども、吾等日々夜々に起り來る妄念の爲めに、一切萬有の現象が雜然と造作されるのである。而してその造作の根本原因に就ては、先づ根本無明が一法界の眞如を眞如と通達せないところに起るので、絶對無二の眞如に對して相對差別の見を起すからである。素

より吾等の心性は自性清淨であつて、如何に根本無明の爲めに惑亂せられても、心性の自體まで變質するものではないから、これを不變の義と云ふて居る。而してこの心性の本體が無明の縁に動かされて現象差別の生滅心となり、生滅心と不生不滅の眞如心とが二者別體のものではなく、水に依つて波の生ずるが如く、水波同體であるが、唯だ靜と動との相違のみである。この二者和合して非一非異なるを阿黎耶識と云ひ、阿黎耶二轉三轉して、漸々細より麤に出で、生滅差別の現象を顯はすと云ひ、これを隨縁の義と呼んで居る。この隨縁の根源は無明の縁であるが、この無明は如何にして起るか、その起因に關しては、眞如を眞如と通達せないとところに起因すると説き、恰かも東を東、西を西と知らざるところに迷妄の生ずるが如く、直接眞如に迷ふ煩惱であつて、最極微細のものであるから、能所主伴の相應もなく、その存在は眞如と同じく無始無前である、時間的に忽然念起したのではなくして、實に無始無前の義を顯はしたものであるが、さて此處に古來より眞如縁起の三大難として論究せらるゝのは眞如と無明との關係である。而して其の無明の起源は如何、その無明の終局は如何と云へる問題であつて、第一を眞妄別體の難と云ひ、第二を眞前妄後の難と云ひ、第三を悟後却迷の難と呼んで居る。

しかし此の問題たるや、決して『起信論』のみに依つて起つた論難ではない、遠く『圓覺經』などに
も出て居る説で、その經文を擧ぐるならば、

世尊、若諸衆生本來成佛、何故復有_二一切無明_一、若諸無明衆生本有、何因緣故如來復說_二本來成佛_一、十方異生、本成佛道後起_二無明_一、一切如來何時復生_二一切煩惱_一、(大正新修大藏經第十七卷九一五丁)

即ち第一の問は眞前妄後の難に當り、第二の問は眞妄別體の難に當り、第三の問は悟後却迷の難に相當して居る。而して此れに對する釋尊の御說法は譬喩を擧げて諄々と答へて居らるゝが、その要文を擧げるならば、

能以_二有思惟心生輪廻見_一、入_二於如來大寂滅海終不能至_一、是故我說_二一切菩薩及末世衆生、先斷無始輪廻根本、善男子、有_二作思惟從有心起_一、皆是六塵妄想緣氣、非實心體、已如空華、用_二此思惟_一辨_二於佛境_一、猶如_二空華復結空果_一、展轉妄想無_二有是處_一、善男子、虛妄浮心多_二諸巧見_一、不能成就圓覺方便、如是分別非爲_二正問_一、(同上九一六丁)

と云ひ、その問の理論的哲學的なるに對して、その答は非理論的宗教的である。無始輪廻の相對有思惟心で以て佛境圓覺の絶對を知ることが出来ない、須らく無始輪廻の根本たる有思惟心を去れ、去つて始めて一切如來の妙圓覺心を體驗し、そこに生死なく涅槃なく、凡夫なく諸佛なく、眞と妄との空華に等しきを了せんのみと諭示せられて居るが、これ實に釋尊無上の慈誨であつて、素より吾等の大に隨喜渴仰するところではあるけれども、尙ほ此處に眞妄に關する研究と題して、少しく史實の示すところを辿つて小論を試み、特に我が禪宗の立場を明かにして見やうと思ふのである。

支那唐代に復禮法師と云ふ人があつて、謂ゆる「真妄頌」なるものを作り、之れを當時の天下に發表して、學者の答頌を求められたと云ふことは有名なる史實である。即ち復禮法師は華嚴宗の開祖たる賢首大師と同時代の人で、唐の地婆訶羅三藏、實叉難陀三藏の譯場に入入して、『七卷楞伽』、『十華嚴』の翻譯には非常に力を盡した人である。著書としては『十門辯惑論』三卷があつて、當時の頌學と云はれる人であつたらうと思ふ。『宋高僧傳』十七に

禮之義學時少比儔、兼有文集行於代、加復深綜玄機、特明心契、作真妄頌問天下學士、繫和者數人、當草堂宗密師詮擇臻極、唯清涼澄觀得其旨趣若盧郎之米粒矣、餘未體禮師之見、故唐之譯務禮爲宗匠、故惠立謂之譯主、譯主之名起於禮矣、妙通五竺融貫三乘、古今所推世罕倫匹（『大正新修大藏經』第五十卷 八一—二丁）

これに依つて見ると、復禮法師の「真妄頌」なるものに繫和するもの數人あつて、その中にも特に清涼大師澄觀の答頌が其の旨趣を得て居ると申して居る。先づ復禮法師の「真妄頌」とは、

眞法性本淨 妄念何由起 從眞有妄生 此妄安可止
無始即無末 有終應有始 無始而有終 長懷懣此理

願爲開玄妙 析之出生死

と云ふのであるが、初めの四句は眞の法性を以て本來清淨の法となし、妄なるものは如何にして生ずるや、若し妄が眞に依つて生ずるものと云ふならば、妄は眞のある限りは斷盡することが出來ないではないか、然るに妄は止んで眞に歸するとは如何に説明をなすべきかと云ふのである。次ぎの四句は眞を以て無始無終のものとなし、妄を以て無始有終となすは、到底道理として信することが出來ないと云ふのである。無始の存在は無終の存在を許さねばならぬ、然るに無始のものが斷盡せられて無となり、有終のものとなると云ふことは氷解することが出來ない疑問であると云ふのである。後ちの二句は天下の學士に向つて此の疑問の解決を求めた言葉であることは申すまでもない。而して此の「眞妄頌」なるもの、中に於て、前に掲げた眞如緣起の三大難が含まれて居ることは自明の事實で、「眞法性本淨、妄念何由起」とは眞妄別體の難に當り、「從眞有妄生」とは眞前妄後の難に當り、「此妄安可止」とは悟後却迷の難に當り、「無始即無末」已下は妄の無始有終と云へる非論理に對する究明であつて、前三難の概括的總問とも見るべきものであらう。

この復禮法師の「眞妄頌」に就て繫和するもの數人あり、草堂宗密禪師が詮釋したと申して居るが、彼れの述作たる『圓覺經大疏鈔』第六之上、『圓覺經略疏鈔』第七に、安國寺の利涉法師と章敬寺の懷暉禪師との答頌が出て居る。その中、利涉法師に就て云へば、彼れは『宋高僧傳』第十七に依ると、

「契門賢哲幅湊、涉季孟於光寶之間」とあるから、玄契門下に屬する人であつたらう、その答頌も眞と妄とを全然別なるものと見て居る。

眞法性本淨 妄復何當起 妄不從眞生 無妄何可止

既許無初末 寧容責終始 無始亦無終 誰當憐茲理

胡不趣無生 乃云析生死

と云ひ、謂ゆる眞を以て圓成實性の清淨眞實法となし、妄を以て遍計所執の體性都無法となし、兩者の間は本來沒交涉のものであつて、體性都無の妄法に對して無始有終を論ずるのは抑々の誤りである主張するのである。

次に懷暉禪師に就て云へば、彼れは『宋高僧傳』第十に依ると、「禮洪州大寂禪師、頓明心要」と云ふて居るから、明かに禪宗に屬する人であつたらう。その答頌としては

法性非垢淨 眞妄非如理 去妄欲求真 茲妄安可止

無物本自無 強無無不已 無始見有終 見終非無始

諸法無自性 無性無生死

と云ふて、眞と妄とを最初から認めて居らないのである、況んや始終を論ずるが如きは共に徒勞に屬する話であると申したので、前の利涉法師は眞と妄とを兩立させて、その間に沒交涉なりと云へ

るに對し、今は初めから兩立をも許さないもので、一切諸法本來無自性であつて、無性無生死と結んだのである。

この利涉法師と懷暉禪師とに對する宗密禪師の批評は、共に復禮法師の問意を識らないものであると云ひ、更に華嚴宗の教義に依つて「眞妄頌」に答へて居るが、これより先き、既に宗密禪師の師たる清涼大師が『華嚴大疏鈔』卷三十四之下に於て答へ、これを以て『宋高僧傳』の著者贊寧等は「唯清涼澄觀得其旨趣」と賞揚したのである。即ち其の答頌としては、

迷眞妄念生 悟眞妄則止 能迷非所迷 安得全相似

從來未曾悟 故說妄無始 知妄本自眞 方是恒常理

分別心未亡 何由出生死

これに依つて見ると、華嚴宗の答頌は、眞を以て所迷となし、客觀の實在法と見、妄を以て能迷となし、主觀の妄分別と見て居るから、眞と妄とを同例に論ずることは出来ない。本來が眞に迷ふて、未だ曾て悟らないから無始と云ひ 眞を眞と悟つたところに妄は止むから有終と云はねばならぬと云ひ、更に眞が能く妄を生ずるのではなく、妄が眞に迷ふて起るのである。然らば眞が先きで妄が後であるかと云ふに、それは時間的の説明であつて事實には相違して居る、事實は眞如と同じく無始の妄念である。これを『瓔珞經』には無始の無明と名づけ、『起信論』には忽然念起と申して居

るが、忽然も時間的の意味ではない、真如が無始の存在であれば、真如に依つて起る無明も無始無前であらねばならぬ。而して真と妄とに對する四句分別として宗密禪師は左の二種を説いて居る。

一、				二、			
有	始	無	終	有	始	無	終
—————				—————			
始	無	終	無	始	無	終	無
—————				—————			
妄	念	(前六識)	一期生死	真	智	明	如

これを要するに華嚴宗の教義は緣起系に屬するから、その答頌も主として眞法本來清淨なりと云ふ立場に立つて、始終を解決しやうと試みて居るが、若し夫れ華嚴圓融の義に約して論ずるときには同じく始終なく、無始無終と云ふことも云へないこととなる、唯だ言を亡じ想を絶して斯の玄旨を會得するより外はないと説くのである。

三

華嚴の緣起系に屬する答頌を述べ畢つたから、次に天台の實相系に屬する答頌を考察して見ることとせやう。天台宗の答頌として擧げらるゝものは『佛祖統紀』第十一に出て居る如皋師の答頌と、『十不二門指要鈔詳解』下末に出て居る可度師の答頌とである。尙ほ此の外に山家學派の巨匠たる四明大師智禮は『四明尊者教行錄』第四、及び『十不二門指要鈔』附録に、「答泰師十問並再答三問」と云ふのが出て居る、これは正しく復禮法師に對する答頌ではない、禪宗の清泰禮師に對する十問並再問三ヶ條に對して、委しく四明大師の答へられたものであるが、その内容は矢張り眞と妄との關係が骨子であるやうに思ふ、即ち第一問は無明法性前後有無の疑問であり、第二問は無明の始終有無の疑問である。今その答釋のみを擧げるならば、

答一、若論本具、平等一性則非眞非妄、而不說有無、明法性亦不論於有始有終、但衆生自無始忽然不覺、迷理而生無明、無明有熏眞之用、法性有隨妄之能、眞妄和合名爲緣起、故金錫曰、無有無波之水、未有不濕之波、在濕詎聞於混澄、爲波自分於清濁、雖則有清有濁、而一體無殊、所謂清濁波者眞妄兩用也、清濁濕性者一體無殊也、無明法性體一故起無前後、故起信論云、如來藏無前際故、無明之相亦無有始是也、若覺悟時遂妄即眞、了無明即是法性、約修門說、

義當斷妄、雖曰斷妄、妄體本真、妄何所斷、故曰、無明亦無有終、又若究其正迷之時、如夢中人、而不知是夢、忽然夢覺、迷妄自息、是則風息水澄、妄消真顯矣、審而思之、無俟多論也
二答、具德圓常正性真空妙有遇緣而發、法爾如斯、不勞造作、且迷妄緣起者、如人忽睡、靈燭潛生
眼觀剎那狂覺忽起、一切衆生所迷真如能迷不覺、真妄和合二無二相、然則佛性雖一、迷悟雖同、六道四生遇緣、熏習親疎不等、根性利鈍有異、是故覺有前後、誠不可以無明法性一故根性俱同也、是知、一切衆生迷無前後、覺有前後、譬夜間多人同睡、睡時雖同、不妨前後起也、善解此譬、來問自消矣

〔大正新修大藏經〕第四十六卷
八九一丁

これに依つて見ると修性二門に約しての答釋である。修門に約すれば斷妄證眞の故に眞妄始終を論すべきであるけれども、性門に約すれば無明法性體一であるから、衆生無始の無明を指して直ちに法性となすべきである、即ち平等一性にして非眞非妄と説いて居るのが答釋の主眼である。これを移して以て復禮法師に對する答釋として考へるならば、彼れは眞妄始終を立て、問ふて來たから、其の眞妄始終と執着する妄情を奪ひ去つて、「非眞非妄、而不説有無、明法性亦不論於有始有終」と一蹴して居ることは、大に注目すべき態度であらうと思ふ。この答釋の主意に依つて可度師は、『十不二門指要鈔詳解』に、「原夫法界平等、非眞非妄」と云ひ、「眞妄同源、本無終始」と云はれて居るのは、是れ正しく四明學派の流れを稟けたもの、説として信ずることが出来る。

また如杲師は四明大師の法孫ではない。「佛祖統紀」第十一に依ると、四明と同じく學んだ義通門下の遵式五世の法孫に當つて居る。即ち遵式、祖紹、慧辨、從雅、如杲と相承して居るが、その學説は四明山家派と同唱である。復禮法師の答頌として左の如く述べて居る。

眞不守自性 照分能所起 隨緣染淨熏 復性方可止

眞妄一體卽 故說無終始 迷悟自情分 始終宛然理

達此眞妄源 誰復受生死

と云ふて居るが、その骨子は四明大師と相違するものではない。前に掲げた第一答、第二答を熟讀玩味したならば、台家の眞妄に關する大體は知れるので、今の「眞妄一體卽、故說無終始」と答へたのは性門の義邊であつて、これ台家の主眼とするところである。

尙ほ台家の眞妄に對する研究は『台宗二百題』第九に「如來藏染淨」及び同第十一に「生死始終」「無明本有」の三論題を掲げて居るが、共に性門の義邊に約し、如來藏の理内に染淨を具すと云ひ、生死に始終あるべからずと説き、無明は無始本有の法であると力説して居るので、實相系に屬する天台としては、當然の歸結であらうと思ふ。

これを要するに緣起系に屬する唯識華嚴の答頌は、眞法性本來清淨なりと云へるに對して、この實相系に屬する天台の答頌は、眞性平等にして眞妄一體である、眞と云ふべきに非ず、妄と名づく

べきに非すと云ひ、彼れが眞を以て無始無終となし、妄を以て無始有終と云へるに對して、これは眞妄共に始終あるべからずと論じて居ることに注意せなければならぬ。この縁起系實相系は佛教の二大系統であつて、素より全然別存するものではないけれども、一往その何れかを主として教義を説明して居ると云ふことは争はれぬ事實である、従つて眞妄に關する態度も一往その所見を異にして居ると云ふことを忘れてはならぬ。

四

次に我が禪宗に於て復禮法師の「眞妄頌」に答へたものは、前に掲げた懷暉禪師の外に洪覺範禪師である。この覺範禪師は博學な人であつて、俱舍唯識の學問にも精通して居られたのであるが、その著述としては『禪林僧寶傳』三十卷、『石門文字禪』三十卷を始め、總べて十四部一百六十五卷の多きに達して居る。謂ゆる教禪の達者、詩文の異才として知られた學匠である。委しい傳記は『普燈錄』第七『五燈會元』第十七を始め多くの僧傳に出て居る。

この洪覺範禪師は黃龍派に屬する人で、黃龍慧南、眞淨克文、德洪覺範と云ふ法系である。師の「眞妄頌」に對する答頌は『林間錄』上に出て居るが、その前に清涼圭峰二師に對する師の批評が出て居るから、今その全文を掲げることによやう。

清涼國師答曰、迷眞妄念生、悟眞妄即止、能迷非所迷、安得長相似、從來未曾悟、故說妄無始、知妄本自眞、方是恒妙理、分別心未忘、何由出生死、圭峰禪師答曰、本淨本不覺、由斯妄念起、知眞妄即空、知空妄即止、止處名有終、迷時號無始、因緣如幻夢、何終復何始、此是衆生源、窮之出生死、又曰、人多謂眞能生妄、故妄不窮盡、爲決此理、重答前偈曰、不是眞生妄、妄迷眞而起、悟妄本自眞、知眞妄即止、妄止似終末、悟來似初始、迷悟性皆空、皆空無終始、生死由此迷、達此出生死、予味二老所答之辭、皆未副復禮問意、彼問眞法本淨、妄念何由而起、但曰迷眞不覺、則孰不能答耶、因爲明其意、作偈曰、眞法本無性、隨緣染淨起、不了號無明、了之即佛智、無明全妄情、知覺全眞理、當念絕古今、底處尋終始、本自離言詮、分別即生死

（『國譯禪宗叢書』第二卷）

清涼大師の答頌は前に掲げて説明したのであるが、圭峰宗密禪師も大途これに同じである。唯だ一層に説明を丁寧に加へたと云ふまでいあつて、その主旨に至つては共に相違するものではない。眞を以て客觀の實在法と見、妄を以て主觀の妄分別と説き、眞の實在法に迷ふて妄分別を起すのであるが、その妄分別を妄なりと悟れば、妄は止み、本來獨自として實在法のみとなる譯である。然るに覺範禪師は是の二師の答頌を以て、未だ復禮の問意に副はずとなし、自ら一偈を作り、「眞性本無性、隨緣染淨起」と申されたのである。この眞性とは素より言詮を離れたところであつて、染と

か淨とか、真とか妄とかと分別するのは盡く凡夫の妄情である、須らく當念に古今を絶せよ、何の處にか終始を尋ねんと云はれたのが覺範禪師の主張ではなからうか。

これに依つて覺範禪師の答頌を考へて見ると、眞法性を説いて離言の境となし、理論で以つて盡きるものではないから當念に古今を絶せよと勸めて、巧みに問題を逃れたやうにも思はれるが、しかし實際に深く考へて見ると本自ら言詮を離れ、無分別の境界であると云ふより外はないのである。唯だ一般の經論家は高尚な理論を弄んで、洵とに形式だけは理路整然として顯はれて居るけれど、果して内容がそれに伴つて十分に會得されて居るのであらうか。何の工夫もせず、言語だけを勝手に振り廻して居るとしたならば、それは佛教の詭辯論者と云はねばならぬ。真と妄とは二元か一元か、これを如何に統一するかと云ふが如きは、抑々法界の實義に達せざるものが説けば、盡く空論であり妄爲である。佛教には常に此の二元を統一させ、而かも各々を無視することなく、大に意義を興へ價値付けて居るではないか。そは各宗各派に論なく實修門の眼目とするところで、殊に我が禪門は法それ自らを體驗するにあるので、理論を説明しては居らない。試みに我が宗祖臨濟大師の活眼精に依つて、真と妄とを如何に見て居らるゝか、左に少しく述べて見ることにせやう。

五

先づ宗祖臨濟大師の『臨濟錄』に

道流莫錯、世出世諸法皆無自性、亦無生性、但有空名、名字亦空、爾祇麼認陀闍名爲實、大錯了也、設有皆是依變之境、有箇菩提依、涅槃依、解脫依、三身依、境智依、菩薩依、佛依、爾向依變國土中覓什麼物、乃至三乘十二分教、皆是拭不淨故紙、佛是幻化身、祖是老比丘、爾還是娘生已否、爾若求佛卽被佛魔攝、爾若求祖卽被祖魔縛、爾若有求皆苦、不如無事（『臨濟錄』三十一）と云はれて居る、今これに依つて考へて見ると、一切の世間出世間の法は皆無自性空であつて、更に生相はない、但だ空名のみあつて本來が依變のものばかりであるから、それを認めて佛なり祖なりと錯り了らば盡く佛魔に攝せられ、祖魔に攝せられて、煩惱妄想の根元とならぬものはないのである。「眞佛無形、眞道無體、眞法無相」であるから、そこに何等の一物をも立せないのである。即ち徒らに幻化上頭に摸を作し様をなし、たとへ所得ありとするも、それは野狐の精魅に過ぎないので、決して眞佛ではない。眞佛とは現前目前聽法底の那一人である、今日多般の用處、什麼をか缺少するところかあらん。須らく自己に立ち返つて本來の面目を徹見せなければならぬと勧められたのである。

大德時光可惜、祇擬傍家波波地、學禪學道、認名認句、求佛求祖、善知識、意度莫錯、道流

爾祇有一箇父母、更求何物、爾自返照看(同十丁)

と云はれて居るところ、實に臨濟大師無限の慈悲ではないか。而して這の一箇の父母ありと云はれて居るのが、自己本來の面目坊である、目前孤明歷々底の這箇であつて、無依の道人とも、屋裏の天真佛とも、平生無事底の那一人とも云はれて居る。

臨濟大師は常に無事底を擧揚して居らるゝが、しかし臨濟大師の無事底には深い子細のあることであつて、單なる無事底ではない。無事底に事を見るところ、古人着語して「當頭霜夜月、任運落前溪」と云はれて居るが、即ち大休歇の上の無事底であつて、佛と云ふも無し、魔と云ふも無し、清淨と云ふも無し、染汚と云ふも無し、本來が無佛無衆生、無古無今、無修無證、無得無失である。と云はれて居る。故に臨濟大師の眞法は無相であつて言詮を絶したものである、元來が眞法とか無相とか云ふべき言葉さへ無いのである。然るに此處に一念心、情生すれば智隔たり、想變すれば體殊なつて、三界輪廻の苦患を招くのであると云はれて居る。

要するに臨濟大師は即今目前孤明歷々地に聽く底の那一人を見得せよと勧め、念々の馳求心を歇めよ、大休歇のところ、良く凡に入り聖に入り、染に入り淨に入り、魔に入り佛に入り、生死に入り涅槃に入つて、而かも去來の相貌あることなく、更に一箇の形段なし、佛と云ふも無得、眞と云ふも不可得、爾須らく心を擬するを止めよ、念を動ずることを止めよ、無心無念たれ、他の惡知識

の口裡語に依ることなく、他の經論家の閑名字に惑はさるゝ莫れど、實に懇切を極めた御垂誠ではないか。

無心、無念、無事、無相、無住と云ふが如きは常に禪宗に用ゆる語であるが、この一箇の無の字、決して頑空無記の見ではない。明匠に參じ實地に體達せよと云ふどころ、是れ禪宗の生命である。唯だ理論を弄び、理路整然として一糸亂れざるの論鋒があつても、實地に親しくないものであるならば、それは徒らに教相家の閑名字と云はねばならぬ。禪宗の尊ぶところは實地を生命とするので、たとへ文字には無と云ふも有無の無を示して居るのではない、無良く有の義を全うしての無である。今これを諸祖の語録より摘出して無の義を詮はすことにせやう。先づ『六祖壇經』に於て

若前念今念後念、念念相續不斷、名爲繫縛、於諸法上、念念不住、卽無縛也、此是以無住爲本、善知識、外離一切相、名爲無相、能離於相、卽法體清淨、此是以無相爲體、善知識、於諸境上、心不染、卽無念、於自念上、常離諸境、不於境上生心、若只百物不思、念盡除却、一念絕卽死、別處受生、是爲大錯

〔增註六祖壇經〕上卷三
十四丁

卽ち六祖大師は「無念爲宗、無相爲體、無住爲本」と説き、その中に於て特に無念を委釋し、「無者無二相」と云ひ、「念者念眞如本性」と云ひ、眞如は念の體、念は眞如の用であつて、眞如全體の起念を云ふのである。縁に應ずるの時、念會て生ずるにあらず、縁に應せざるの時、念會て滅

するにあらず、無性の性、無念の念である。鏡像水月の譬喩を以て天桂禪師の『海水一滴』には註釋を加へて居るが、その要とするところは木石の如き單なる無念の状態を云ふのではないと誠しめられたものであらう。また無心に就ても黃檗禪師の『傳心法要』に委しく説明せられて居る。

此心即無心之心、離一切相、衆生諸佛更無差別、但能無心便是究竟、學道人、若不直下無心、累劫修行、終不成道——造惡造善皆是著相、著相造惡、枉受輪廻、著相造善、枉受勞苦、總不如言下便認取本法、此法即心、心外無法、此心即法、法外無心、心自無心、亦無無心者、將心無心、心却成有、默契而已。(『傳心法要』三丁)

これに依つて考へて見るに、無心と云ふも一切の妄想心なき心であつて、虛通寂靜、如々の體、本佛上の妙境界であつて、たとひ三祇百劫の修行を積み、五十二位の次第を経るとも、一念證する時に及んでは元來自佛を證するのみであつて、更に一物の添得するものではない、却つて歷劫の功用を觀するに、總に是れ夢中の妄爲となるのである。『楊岐和尚語錄』にも、

上堂、拍禪床一下云、只箇心心是佛、十方世界最靈物、釋迦老子說夢、三世諸佛說夢、天下老和尚說夢、且問諸人、還會作夢麼、若也作夢、向半夜裏道將一句來、良久云、人間縱有眞消息、倫向楊岐說夢看、參。(『禪學大系』祖錄部二丁)

實に然り、本佛上より看來れば、總に是れ夢中の妄爲のみである。故に學道の人は須らく念々無

相念々無爲にして、一切の佛法を學ぶことを用ひざれ、唯だ無求無著を學んで直下に無心なれと勸められて居る。

六

已上不秩序ながら禪宗の眞妄に關する考察を述べ畢つた、素より實地を生命とする禪宗であるから、的確に理論を立つるのではないが、しかし眞とは如何なるものか、妄とは如何なるものかと云ふことだけは、臆氣ながらにも了解出来るであらう、眞に臨濟大師の謂ゆる大休歇のところに至つて、始めて自己本來の面目を徹見することが出来るので、こゝを無心とも無念とも無事底とも呼んで居るのである、而して眞とか妄とか、染とか淨とか云ふべき二境の有るのは盡く一念心の疑慮であり、夢中の妄爲であると云ふことを説き、總に其等一切を打して大休歇に到れと云ひ、『圓覺經』に於ける釋尊の御説法の如く、無始輪廻の相對有思惟心を去つて、佛境圓覺の絶對無思惟心を體驗せなければならぬと歸結するのである。